

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行
第8回フォーラム研究会
逐語録

(木村) それでは、第8回フォーラム研究会を始めたいと思います。

まず、資料番号をつけていきたいと思います。議事次第が F8-0 です。第7回フォーラム研究会の議事録案が F8-1 です。ビジネス要件、システム要件の資料が F8-2 です。今日は3種類になります。

議事次第をご覧ください。今日は、フォーラムのシステム化についての検討がメインになります。3時間で詰められるところまで詰めていきたいと思っています。よろしくお願いします。

0. 議事録確認

(木村) まずは議事録の確認です。第7回の議事録案と逐語録案は、ギリギリになりましたが、昨日メールにてお送りしていますので、ご覧いただければと思います。

前回は、フォーラムの応募用紙の検討がメインでした。

システム化についてはほとんど話し合う時間がありませんでしたが、いくつか論点は出されていますので、今日はそれらを見ながら議論していただければと思います。

フォーラムのシステム化とは、「フォーラム」というものをどのように社会に実装していくかということを考えて、機能と、それをやるための要件を整理するということです。

前回は、「参加者のやる気」「オープンエンドであること」などが要素として出されています。こういった要素をどこに入れたらいいのかということもディスカッションしたいと思います。

なお、フォーラムの応募について、現状をお伝えしておきたいと思います。1月上旬から社会調査が始まっています。1月の終わりには、申し込みがどのくらい来ているという連絡が私のほうに入り、その後私のところに申込書が来る予定になっています。2月24日の第9回の際にはフォーラム参加者の選定を行なうこととなりますが、その前に、申し込みの数を踏まえ、皆さんに、追加の応募者を探して下さいというお願いをさせていただくことになるのではないかと思いますので、よろしくお願いします。

ということで、前回の議論と、フォーラムの応募に関してのお話をしましたけれども、ここまでで何かございますか？

—— フォーラムの応募の締め切りはいつまでなのですか？

(木村) 1月31日が締め切りなので、2月上旬には輿論科学協会から、どのくらいありました、という連絡がくると思います。調査自体は、確か1月24日くらいに終わります。他はいかがでしょうか？

1. フォーラムのシステム化について

(木村) そうしたら、フォーラムのシステム化について、検討を進めていきたいと思えます。

資料 F8-2 と、前回の議事録の3ページ目をご覧ください。

F8-2 は、前はパワーポイントで用意しましたが、特にパワーポイントで整理する必要もないかなと思って、ワードに落としたものです。

一応復習しておきます。「フォーラム」というものをうまく横展開するために、研究としてシステム化に取り組みたいということ、PO の岩田先生とも検討をしてみました。その方向でよかろうということで、今、検討を進めているところです。

ビジネスにおけるシステム設計の考え方を採用して、システムを明確化しようと考えています。四角い枠の中に書いてあるのは、ビジネスにおける一般的な考え方です。

ビジネス要件は、

- (1) 企業がそのビジネスを行う目的を明確にする。
- (2) ビジネスにより達成したい目標を設定する (例: 売上高や利益など)。
- (3) 設定したビジネス目標を達成するための、プロセスやフローを定義する。

が挙げられます。

システム要件は、

- (1) ビジネス目標を達成するために、ユーザーがシステムを使用して行う仕事を明確にする。
- (2) ユーザーの視点で、システムは何を行う必要があるかを定義する (例: 商品を発注する)

ということになります。

このシステム要件を踏まえて、実際のシステムの要素にはどのようなものがあるのだろうか、というような順番で、システムを設計していきます。この方法に則って、フォーラムというシステムをゼロから整理することがシステム化につながるのではないかと考えて、現在整理をしているところになります。

フォーラムを使った事業を考えたときに、その事業はどのような機能を持ちうるのか、ということが、その下に書かれています。

まず、目的は、

(1) 福島事故以降の専門家と市民の関係性を改善する。

になります。すなわち、現在、専門家と市民の関係性が、特に信頼という観点において非常に悪化している。これを前提として、今後の関係性を構築しなければいけない、少しでも改善したい、というのが目的になります。

そのためにどういう目標を設計しているかという点、

(2) 専門家と市民の不信の悪循環をストップさせるためのコミュニケーション・フィールド(=システム)を設計する。少なくとも、専門家と市民の間にあると思われる境界を越えるための、が最低限の目標。

ということになります。

そのために、この事業では、

(3) 「フォーラム」を試作し、目標が達成できるかを分析し、「フォーラム」というコミュニケーション・システムが提供する機能を明確化する？

ということをしていく。特に、平成 26 年度はこの部分を明確に打ち出していきたいということになります。

次に、このような事業を行うために、フォーラムというシステムを作らなければいけないわけですが、フォーラムというシステムはどのような要件を持つのかということが次に書いてあります。

(1) は 2 つありますが、1 つ目は薄く灰色で書いています。

(ユーザ(このシステムを使う人)は、「フォーラム」を利用して、専門家と市民がお互いに尊重できる関係性を構築することを誘発する。)

これは、実際にフォーラムというシステムが出来上がって、外に展開していくときにはこういうことも機能に含まれるといいなということで書いています。つまり、(1)、(2) が達成された後で、ということになります。

そういう意味では、(1)、(2) が重要になります。

(1) ユーザ(専門家と市民=参加者)は、「フォーラム」を利用して、お互いに尊重できる関係性を構築する。

(2) (システムは)参加者(=専門家と市民)がお互いに尊重できるような場を提供する。ということが必要になってくるということになります。

次のページは、システム要件をさらに噛み砕いて、項目ごとに分けて書いています。今日は、2 ページ、3 ページ目に書かれているシステム要件について、ディスカッションしたいと思っています。

「フォーラムがビジネス要件を達成するために満たすべき要件」、すなわちシステム要件は、「参加者がお互いに尊重できる」になります。その下に、1、2、3の小項目が書いてあります。1と2は、1があり、その次に2があるという関係性になっています。3は、「お

互いに尊重できる」ためにフォーラムが持つべき要件になります。

順番に、簡単に説明していきます。

「1. 参加者間の社会的リアリティの違いに気づく、いろんな考え方があると気づく」。この項目はさらに4つに細分化しています。①参加者の客観視を導く、参加者同士のコミュニケーションを客観的に見るように導く。②人となりを知るように導く。③参加者の冷静なコミュニケーションを導く。④ぶっちゃけトークを導く。まあ、本音トークですね。「本音を話し合えるように導く」ということです。

これらの要件を満たすためにフォーラムというシステムが持つべき要素が、さらにその下に箇条書きで挙げられています。例えば、1の②には、フェース・トゥ・フェース (FTF) のコミュニケーション、お互いの価値観を表明できるような話題設定、複数回のフォーラム、などがあります。

次は、「2. お互いが違っててもいいんだと思える」です。1でいろいろな考えがあるということに気づき、さらに、お互いが違っていてもいいんだと思うことで、互いに尊重できるということです。

「3. 参加者同士が対等である」。特に市民と専門家の間が重要だろうということです。

次に、「フォーラムを実施するために満たすべき要件」には、「4. 参加者同士が公平である」「5. 運営側への信頼の獲得」という項目があります。

さらに、前回の議事録を見ていただければと思いますけれども、「フォーラムを実施するために満たすべき要件」の中に、「参加者のやる気」が入るだろうということです。「6. 参加者のやる気」という項目を立てたほうがいいかな、と思っています。

その他に、「フォーラムの目的を共有する」「オープンエンドである」などの要素が前回の議論の中で挙げられています。これらをどこに入れたらいいのかということも含めて、ディスカッションをしていただければと思います。

また、もうかなり時間は経ってしまいましたが、実際のフォーラムの場面を呼び起こしてもらって、こういう出来事がこの部分にこう寄与していたと思う、ということも自由にお話しいただければと思っています。

ということで、一通り説明しましたが、いかがでしょうか？

—— 今の我々の活動は原子カムラの問題を取り上げているから、専門家と市民の間でのコミュニケーションがターゲットだということは間違いないのですが、せつかく素晴らしい仕組みができたのだから、限られた用途だけではなくて、もっといろいろな活用の仕方があると思うのです。

例えば、福島の問題で言えば、今後、避難している人たちが放射能の高いところに戻っていかねばいけない。本当に戻れるのか、戻れないのか。その根本には放射能

問題が大きなバリアとして横たわっているのです、そこには原子力の専門家が協力できる素地があると思うのだけど、それは従来型の知識提供型のコミュニケーションでは決してできないので、フォーラムのような形式で、自分たちは戻れるのか戻れないのか、みたいな議論を重ねていく必要があると思うのです。

復興がらみでは、それに限らずいろいろあると思うけれども、私が一番やりたいなど思っているのは放射能問題です。専門家の人たちが少しでもお手伝いできないか。大上段に振りかざして、「放射能は安全です」などと話をしても、もう今は何の意味もないし、かえって反発を招くだけです。これからどうしたらいいだろうかということ住民の人たちが主体的に考える。専門家がそばにいてそれに協力をする。そういう形式のフォーラムが一番いいのかなという気がするのです。

ビジネス要件の中に、そういうオプションがあってはまずいのかしら、というコメントです。

(木村) はい。今回は機能を明確化することが中心になりますが、応用として、この部分をマイナーチェンジすればこういう活用ができる、というところが見えるような形にはしておきたいと思うのですね。今のお話は、応用のひとつの形になると思います。それはシステム要件をまとめようという話とは少し違いますけれども、最終年度の報告書で「ここまでの応用可能性がある」ということが言えるといいな、とは思っています。来年に、もう一度その部分を突っ込んで議論してもいいかもしれません。

他はいかがでしょうか？

では、1つずつ見ていって、コメントをいただければと思います。

まず、「1. 参加者間の社会的リアリティの違いに気づく、いろんな考え方があると気づく」からいきましょう。「①参加者の客観視を導く、参加者同士のコミュニケーションを客観的に見るように導く」については、ファシリテーターの経験が非常に重要だということ、参加者にファシリテーターを経験してもらったという経緯がありますけれども、その他に、客観視を導くという点において、こういうことが役に立ったのではないか、もしくは、こういうことが役に立ちそうなのではないか、というコメントをいただきたいと思います。いかがでしょうか？

—— 前回の議事録に、「グループワークの発表を行うことは、客観視の助けになるのではないか」とあります。

(木村) グループワークの発表というのは、どういう意味で客観視を導くのでしょうか。ファシリテーターの経験は、他の人の話を一歩引いて聞く、ということですね。

—— 発表することには大きな意義があると思います。他の人が何を言ったのかを理解し

ていないと発表できませんから。だから、発表しろと言われた途端に、自分以外の人が何を言ったのかということを実際に考えるようになるから、客観視をする上で役に立つと思います。

ただ、フォーラムの中では、「これは自分の意見ですけど」と断って発表してしまった例もありましたが。

—— いかにも人の意見を聞いて、グループのまとめを発表するのが難しいか、ということの現れだと思うのですね。聞いていなかったり、うまくまとめられないと、「自分の意見ですけど」となってしまう。そういうコメントがなくても、「大事なところは言わなかったな」とか、「ちょっとご自分の意見に偏っているのではないかな」ということもありました。全体を聞いて、まとめて、発表するということができれば、客観視につながると思います。

(木村) 人の意見を聞いて、全体を反映させて、グループワークの発表をまとめることが重要だということですね。

そうすると、他の人の発表を聞くということも要素になりうるのでしょうか？

—— そうですね。

—— 聞くことも大事だけど、質問をペタペタ貼っていくというスタイルも、「他の人は自分の考えに対してそういうふうに思っているのか」ということを知って、客観視できるひとつのきっかけになるかもしれませんね。

—— グループワークで模造紙に意見がバーッと出たときに、それを発表できるような形にまとめていくと、発表が活きるのですよ。模造紙がうまく見える化されて、こういう流れで議論がありましたよね、というヒントがあれば、初めての人でもうまく発表できると思うのです。やはり全体をつかむのは難しく、自分の意見を言うことに精一杯になりがちですから。

本当は、まとめが終わった後にグループの中で1回共有することが大切だと思うのです。そうすれば、誰が発表しても、割と全体の話の発表になると思うのです。それをしないで、いきなりあてられると、自分の意見しか言わないでしょうね。

—— あるいは、貼ってある付箋を順番に読む。

—— そうですね。せいぜいそこまでです。

サブファシリテーターは、それも意識して見える化をするのがコツなのではないかと思うのです。

(木村)　まとめて、それを共有するというステップをプロセスの中に入れておいたほうがいいということですね。

——　それがあれば、いきなりでもそれなりの発表ができるのではないかと思います。

——　すみません、見える化というのは、具体的にどういうことをするのですか？

——　グループワークでは、まず皆がポストイットに意見を書いて、発表しながら出すのですね。それらの付箋を、例えばグループにまとめたり、話の展開でまとめたりするのが見える化です。

——　それをファシリテーターの方がするのですか？

——　本来はファシリテーターの役割なのですが、ファシリテーターというのは参加者がするので、なかなか全部はできないので、サブがすることもありました。

——　グループの中で一度まとめの確認をすれば、それまでに私たちサブファシリテーターがいろいろやっていたとしても、移動したり、ここは違うという確認ができるから、自分たちでまとめた、という感じになりますよね。それは外してはいけない過程ですね。それがないと、やらされた（サブファシリテーターに勝手にまとめられた）という感じになるので、確認が大切だと思います。

(木村)　他はいかがでしょうか？

——　ピンクの紙（ブレインストーミングの進め方）か青い紙（グループワークの進め方）の中に、「人の話をちゃんと聞きましょう」ということを書いていませんでしたっけ？　それも要素に入れていいのではないかと思います。

——　その色紙の中にサブファシリテーターの役割などもきちんと書いていただくと、「サブが勝手にやっていた」みたいな意見が出なくて、ちゃんと位置づけができると思うのです。

——　前回のフォーラムも、色紙を導入してから、とてもやりやすくなりましたよね。

(木村)　ファシリテーターもやりやすそうでした。

—— オリエンテーションで木村先生が一応説明するのだけれども、それだけだと実際の進行場面で覚えていないから、色のついた紙に印刷して、机の上に置いておくと。

—— あれはよかったですよね。皆さん確認しながら進行していました。
サブとしても、やりやすかったです。

—— そうですね。サブがいい加減なことを言っているわけではない、ということが伝わったと思います。「次はここですよ」と指し示しながらやっていました。

(木村) 今の話はどこに入れたらいいでしょうか。運営側の話かな。

—— 運営側のノウハウですね。

(木村) 「運営側のノウハウ」。新しい項目として入れておきましょう。

—— 紙に書いてあることによって、サブファシリテーターが勝手に進行しているという印象をなくせますよね。皆に配られているわけだから。

(木村) また1の①に戻りますけれども、①は機能要件としては一番のポイントになってきます。インタビューの中で、「こういうところが客観的に見れたポイントになりました」みたいな意見はありましたか？

(竹中) もう1回チェックしてみます。

(木村) 今日まとめたものを、改めてインタビューの結果と整合させていくと、今回のフォーラムがどのような効果を持っていたのかが見直せると思っています。そういう意味では、インタビューなども踏まえながら要件を拡充していくという作業も、今後進めていこうと思っています。

では、次に進んでいきたいと思います。また何か気づいたことがあったら、戻っても構いませんので。

次は、「②人となりを知るように導く」というところです。そのために今回は、フェイストゥフェイスのコミュニケーションをした。お互いの価値観を表明できるような話題設定にした。複数回のフォーラムを作った。フォーラム後のお茶のみ時間を設定して、そこでコミュニケーションが取れるようにした。コミュニケーションのルール化。「私は」という話し方を導入したということです。あとは、意見の可視化。これは先ほどの見える化の話

と関わっています。この他に、どんな要素があると思いますか？

—— コミュニケーションのルール化に含まれるのかもしれないですが、「私は」という話し方に加えて、相手の名前を呼ぶということが大事ではないでしょうか。

そのためには、ちゃんと名札をつける必要があります。名札が見えないと名前が呼べないのですね。そうすると話が弾まないのです。

—— NHK のトーク番組は大きな名札を使っていますよね。

(木村) 今のお話は、「対等である」でもないし、「公平である」でもなくて、「尊重する」ですね。相手を尊重しようとする心。あと、コミュニケーションがスムーズになるということですよ。

—— 「コミュニケーションがスムーズになる」ためには、議事録の 2 つ目のポツの「参加者がフォーラムの目的を共有すること」も要素に入るのかなと思います。

—— 「今回のフォーラムはこういう目的で行ないます」と最初に伝えているけれども、それが同じように伝わっているかどうかは分からないですよ。だから、話し合いをしたときに、「結果を出さないのか」という意見が出てくる。

—— 「目的を共有する」のは一番大事なことですよ。

(木村) そうですね。「目的を共有する」という項目は、一番最初に来るべきでしょうか。そして、目的を共有するためには、ちゃんと説明をしなければいけないと。

—— そうですね。オリエンテーションできちんと説明する。まあ、確認のしようがないのですが。

—— 回を重ねるごとに構築していったという面もあるので。最初からそういうことを説明しすぎると誘導みたいにとられるおそれもあると、難しかったですよね。

—— 中盤で目的を確認したほうがいいのかもかもしれませんね。変に誤解していて、最後まで誤解のままだとかわいそうですから。

—— 短い文章で書けるような目的であれば、それこそ毎回、「これをお願いします」という確認をしたほうがいいのじゃないでしょうか。目的というのは一番大切なのですけれども、最後

の頃にはそれを忘れて議論したり、結論を導いたりしがちですよね。

—— それか、毎回資料に書いて、見えるようにしておく。

—— そうですね。やはり毎回確認する必要があると思います。

—— まず大きな目的があって、第1回はこういうことをしました、第2回はこういうことをします、というように、経過も分かるような形で書いておくと、自分たちの今の位置が分かりますよね。私たちも今の位置づけをよく把握しておくほうがいいと思いますし。

(木村) 何を話し合うかはそのときそのときで変わっていきますよね。だから、将来を示すというよりは、今はこれをやりましょうということを示すということですね。

見込みは見せたほうがいいのでしょうか？

—— 見込みはなくてもいいと思います。

—— 目的があって、経過があればいいと思います。

—— 見込みがないほうが、むしろ、決まってないという印象になって、いいのではないのでしょうか。

—— 自分たちでそういうところに到達していこうという意識付けになるのかなと思います。

(木村) そうですね。だけど全体としての目的は変わらずにやっていきましょうと。そこを共有して参加してもらっているということですね。

ファシリテーションの本を見ると、「今回は何をしようとしています」という紙を常に貼っておくとよい、と書かれていたりします。それをことさら毎回言うわけではないのだけれども、それを貼っておくと、「ああ、そういえばこういうことをやるんだったな」と確認しながら進められる。

それから、付箋を貼って見える化していくときも、重ねてしまうのではなくて、全部が見えるように貼り出して、話の展開も見えるようにしておくというのもファシリテーションの方法のひとつなのですね。

—— 模造紙も貼りっぱなしにしておくのですよ。

(木村) 本当はそのほうがいいのですが、機材が足りないという問題もあり…。日本の会議室の壁は、ものを貼れるようになっていないことが多いのです。アメリカの場合、テープでペタペタ貼っても文句を言われませんが。

—— あるいは、壁が全部マグネットになっているとか。

—— 日本人はあまり差を意識しないのだけれども、欧米の組織を見ると、目的とゴールという使い分けをします。書いてある中身が同じでも、わざわざ **Objection** と **Goal** と分けて書いている。例えば、安全規制委員会は、「安全性を達成すること」が両方に書いてあります。

—— 主導的に物事を進めていく人は、チャレンジするというような意味合いを含めてゴールを設定しますよね。そうすると、できないという人たちが出てきたりするのですけれども、「チャレンジするんだ。とにかく目指そう」という言い方をしていますね。

(木村) フォーラムの目的とゴールは、具体的にどう表現したらいいですか？

依頼状には、一般の人たちと専門家の関係をどうやったら変えられるのかを見つける、と書かれています。「立場を越えてお互いを理解し、尊重できるための新しい関係性を見出す」が目的なのか、ゴールなのか。

—— それは目的だと思います。それを少しブレイクダウンして、いつまでにこれをやるという設定をすると、ゴールになると思います。

—— そうすると、フォーラムというのはひとつの手段なのですか？

(木村) フォーラムはひとつの手段ですね。

—— ゴールがあることは、オープンエンドを阻害することにはならないのですか？

(木村) ゴールが結論を導くことでなければ大丈夫です。

—— でも、個人によってゴールは異なるのではないのでしょうか。ここまでやってできた、というものではなくて、どんどん重ねていくと、より深いコミュニケーションができるようになっていったりするわけでしょう。

—— でも、これは個人というよりは、研究の話なのでは？

(木村) そうですね。研究だと、Objection と Goal かもしれない。

—— 究極の目的は、境界を越えることですね。

(木村) そうです。「新しい関係性を生み出すこと」がまさに「境界を越えること」ですから。

—— 境界を越えるための方法や方策として、フォーラムという場がきちんと機能するという、あるいは、どうすれば機能するかを明確にすることがゴールでしょうか？

(木村) 研究としてのゴールはそうなのですが、参加者のゴールではないですね。システム要件というのは、それを使う人がどのように思うかというところがポイントなので、参加者にどういうゴールを求めるといった話になってきます。難しいですね。

—— 「自分がそこに貢献したと思える」ことでしょうか (笑)。

—— (笑) だから個人によって違うのではないかと思うのですが。

—— 市民と専門家との関係性において、そもそも疑問があるのですが、市民は専門家を信頼したいと思っているのか、そうは思っていないのか、その辺がよく分からないのです。

(木村) 原文振の社会調査の結果がその質問に関連していると思いますので、少し紹介したいと思います。専門家や原子力関係者を信頼できる人と、信頼できない人と、どちらともいえないという人が、なぜそう思うのかを聞いています。

信頼できる人は、7割以上の人「専門的な知識を持っているから」と答えています。続いて、「信頼したいから」が3割くらい。「熱意を持っているから」が2割くらい。あとはほとんどポイントがありません。

一方で、信頼できない人たちは、「情報公開が不足しているから」が7割、「正直に話していないから」「安全対策が不足しているから」「配慮していないから」「偏った見方をしているから」「熱意が感じられないから」などが続きます。

どちらともいえない人でポイントが高いのは、「情報公開が不足しているから」「安全対策が不足しているから」「正直に話していないから」。信頼できない人と同じ構造になっています。

だから、「信頼したいから」に導くのはあまりよろしくなくて、重点を置くとしたら、「専門知識を持っているから」くらいでしょうか。

—— これは原子力に関係している人の中で、という意味ですか？

(木村) そうですね。「原子力に関して、専門家や関係者を信頼できると思うか」という質問です。

—— 専門家と言ったときには、自称専門家も巷にはいるので、その点をはっきりさせないといけないと思いますが。

(木村) いや、これは参考資料ですから、これについてディスカッションをしても仕方がありませんので。

こういう状況であることを考えたときに、「信頼」というキーワードでゴールが設定できるとするならば、どういうゴールを設定するか、ということですね。

もしくは、いろいろな理由で信頼する／しないがあるのであれば、個人によって変わってもいいのかなど。その変わる状態を表現するような言葉があるのかどうか。

その辺りについて、何かご意見はありますか？

—— 境界を越えることが全体の目的だとして、このフォーラムのゴールは、相手が何を考えているかを知ることではないでしょうか。

(木村) それはいいかもしれない。

—— そうですね。フォーラムの市民の参加者から、「専門家にもいろいろな専門分野があって、なおかつ本当にいろいろな人がいるということが分かったことがよかった」という感想がありましたから。

専門家の参加者からも、「本当に何も専門的なことを知らない一般の人がどんなことを考え、感じているのか、何を不安に思っているのかが分かってよかった」みたいなご意見がありました。やはりそういう相互理解がゴールでもいいのではないかと思います。

そういうフォーラムが本当はあちこちでできたらいいのしょうけれども。やはり直に接触して話し合うことなしに、そういう感想を得ることはないと思うのです。

—— 1回1回のゴールは、それでいいような気がします。それを積み重ねることによって、次第に境界が越えられるのではないのでしょうか。

—— 普通のおばさんが、フォーラムに参加してみて、家に帰って、「ああだったのよ、こうだったのよ」と家族に話したり、友達に話すことで、空気が変わっていくこともあるの

ではないかなと。

(木村) そうなると、相互理解をしながら、自分が変わっていくということが、参加者個人のゴールかもしれないですね。まあ、それを最初からこちらが言うのはおかしいのだけれども。

—— そうですね。自分で気づかないと。

—— 相手を知ることが自分を変えていくと思うのです。

(木村) 相手を知って、自分が変わっていくというのは、コミュニケーションの基本なので。要は、今までコミュニケーションを取らなかった人とコミュニケーションが取れるようになったということですからね。

—— 先ほどの(原文振の)データは面白いですね。「信頼できない人」が挙げている理由をいくつかピックアップして、それがどうしたら解消されるかを考えてみるといいかもしれないと思いました。

例えば、専門家と何回か話しているうちに、「正直に話してくださっているんだな」と感じるようになるかもしれない。「私たちに配慮していない」と思っていたかもしれないけど、専門家から見た配慮もあるのか、と気がつくかもしれない。その配慮が私たちにとって必要か、必要ではないかということは別問題ですが、それもその場でコミュニケーションできるし。「信頼できない」と思う理由は、専門家と話すことによって埋めていけると思いません。

(木村) 今の話は、フォーラムのシステム化とは違う話ですが、POからの宿題のひとつでもあります。フォーラムが信頼の構築にどういう機能を持ちうるのかを整理しなさい、と言われていたのです。

「信頼できない人はこういう理由で信頼できないと思っている。今回のフォーラムを通して、それらが変わってきた」というような整理はできると思いますか？

(竹中) そういう意味では、先ほど「人の名前を呼ぶことが重要ではないか」という意見がありましたけれども、それは「尊重されていると感じる」ために必要な要素だと思います。だから、1の⑤に、「尊重されていると感じる」という項目を新規に作ってもいいのではないかと思います。

なぜそう思ったのかというと、インタビューの中で、特に市民からですけれども、「専門家というのは横柄で、市民を見下しているのではないかと思います」と思っていたが、しっかり聞けば

真面目に真摯に説明してくれるし、人として扱ってくれていると気づいた」という意見があったからです。

(木村) 「他の参加者から尊重されていると感じる」ということですか？

(竹中) はい。

—— それは分かります。子育てをしてきた主婦は、自分の名前を呼ばれない時期があるのです。「何々ちゃんのお母さん」としか呼ばれないのです。職業を持っている方は、家を出たら、個人の評価で名前を呼ばれるのですが、だから、(特に下の)名前を呼んでほしいという願望があるのです。

—— そうだったのですか。そんなことは考えたこともありませんでした。

—— 先ほど、相手のことを知って、自分が変わるという話がありましたが、今は、まさに「専門家が市民(主婦)のことを知って変わった瞬間」ですね。それはとても大事なことだと思うのです。

—— 主婦に関してさらに言えば、私も10年間専業主婦をやりましたけれども、そういう人は議論なんかしたこともないのですよ。放射線に限った話ではなくて、ひとつ議題なりテーマがあって、初めて会った人たちと意見を交換する、なんて機会はないのです。だから、ああいうコミュニケーションの場があるということ自体が、すごいことというか。

—— 専業主婦をやっている間は、まともなコミュニケーションはしないですね。夫婦げんか以外は。

—— あとはママ友との会話以外は。

—— でも、それはまともなコミュニケーションではないから。

—— やはり双方向のコミュニケーションの成果なのですよ。

—— そうですね。お互いを知って、自分もそういう発見によって変わっていく、みたいな。

—— 私も信頼について勉強をしていて、食品照射をテーマにインタビューをしたのです

が、「食品照射をするといろいろな物質ができて毒になる、と言う専門家がいる」という意見があったのです。その専門家というのは、調べたら、実は専門家ではなかったのです。批判的なグループの方は、その先生が言っているから危険だと言っている。かたや、大丈夫だと言う先生もいるけれども、それは国に取り込まれていると。専門家といっても、なかなか難しい、という話でした。

原子力も、ある先生は原子力は安全だと言うけれども、ある先生は原子力は非常に危険だと言う。専門家の中で正反対な意見がある、というお話をされたので、じゃあどうしたらいいと思いますか、と私が聞いたら、池上彰さんのような、中立だけれども、よく説明している人が「原子力は安全だ」と言ったら、皆信用しますよとおっしゃっていました。

(木村) それは池上彰さんが信頼されているのであって、

—— 私は、池上彰さんは専門家ではないということを言いたいのですよ。

(木村) いやいや、そうではなくて。専門家でない人が言っても信頼されませんよ。池上彰さんだから信頼される、というだけです。

—— 話を戻しますが、個人として扱ってもらえると、原文振さんのデータでいうところの「配慮されている」「正直に話している」に効いてくるのかな、と思います。

(木村) そうですね。

「熱意」はどうでしょうか？ 熱意については、インタビューでもあまり聞いていないですよ。

(竹中) 熱意はインタビューではあまり聞かれなかったかな。

(木村) 「安全対策が不足している」などは個人に依るかな。

—— もしかしたら、信頼が先にあって、信頼したい人が言ってくれたら変わるのかもしれないですけども。

—— そこだと思います。池上さんもそうだと思いますね。

(木村) 「情報公開が不足している」については、皆さん最後まで変わらなかったような気がします。

—— 「原子力は危険だ」と言う専門家がいたら、それに引っ張られるということですね。

(木村) そうです。

少し脱線しますけれども、人は基本的に自分が聞いていて好ましいことを言う専門家を信用するのです。だから、プロセスが逆なのです。信用できる人が言ったことを信用するのではなくて、自分が聞いていて心地いいものを話してくれる専門家を信用するように、自分で専門家を選ぶのです。

—— 市民活動の講師の選び方はまさしくそれですよ。自分たちの意に沿っていることを言ってくれる人を呼ぶじゃないですか。

(木村) だから、池上さんの話はあまり応用ができない。

人というのは、ヒューリスティックスバイアスみたいなところから、証拠を探し出すプロセスを持っている。でも、自分の中では因果関係を詐称するのです。「信頼している人が言っているから」というふうに、因果関係を逆にして、自分を洗脳するのです。

—— 同じ話を聞いても、人によってまるきり逆の取り方をしているときもありますよね。自分が聞きたいところだけを聞いているから。

—— 心配な人には、心配な話をすればするほど安心するという構図ですね。

(木村) 安心はしないですが、「ああ、やっぱり私の心配は心配でよかったんだ」という落ちつきを持つのです。心理的ストレスの軽減になる。

—— でも、それって自分の中でもよくありますよね？

(木村) ありますよ。自分がこういうことでいいのかなと思っていることが、周りからフォローされると、必要以上に思った通りだと思ってしまう、ということはよくあります。

—— 土田先生が前にそれに近いことをおっしゃっていましたね。

(木村) 「不安でいたい大人」と言っていましたよね。

さて、少し脱線しましたけれども、1時間半経ちましたので、一旦休憩を入れたいと思います。

(休憩)

(木村) では、再開したいと思います。

休憩中に、先ほどの議論を受けて、1の⑤に「他の参加者から尊重されていると感じる」という項目を作りました。また、「参加者と目的を共有する」は、大項目にしました。

「②人となりを知るように導く」について、もう少し議論したいと思いますが、いかがでしょうか？

(⑤の)「コミュニケーションがスムーズになる」というのは、どういう意味のスムーズですか？ 流暢に話すということではないですよね？

—— 私がそれを言ったときは、「目的を共有する」に絡めて言ったので…。いわゆる言い争いをしないとか。

(木村) 「③冷静なコミュニケーションを導く」に近いのでしょうか？

「名札をつけて、相手の名前を呼ぶ」は「②人となりを知るように導く」にも含まれますね。

—— 私は参加者でないので分からないのですけれども、最初の1分間スピーチは人なりを知ることに役に立っているのでしょうか？

—— 自己紹介ですか？ 役に立っていると思いますよ。

—— 1分間スピーチはその他に何か意図があるのですか？

—— いや、どういうメンバーかが一瞬で全員に分かるように、という意図だと思いますけれども。

(木村) ②はやはり自己紹介でしょうね。

—— そうですね。自己紹介の1分間スピーチを、私は、ああ、あの人はあのときにああいうことを言った人だな、って見ていましたから。大事だと思いますよ。

—— あの1分間スピーチで、「私は原子力のこういう仕事をして、こういう専門家です」と言われると、ずっとそう思ってしまうよね、やはり。

(木村) 刷り込み効果もあると。

—— 覚えてもらえるから、自分の売り込みにおいても重要なことですよ。皆にいかにかッチーに紹介するか。

(木村) あとは、専門家は青の付箋、市民はピンクの付箋に分けたのは、あえてレッテルを貼って、そのレッテルを越えようとする努力だったわけですが、そういうのはどこに入れたらいいでしょうか。①とも思うし、②とも思うし。やはり②でしょうか。

—— 別に人格や性格ではないけれども、この人はこういうことをしている人だ、と分かるということですよ。

(木村) 誰が言った意見かがだいたい分かるということですからね。

—— 付箋の色を分けたのはよかったです。

—— 専門家はこういったものだろう、だから信用しない、そういう先入観を持っていた人でも、専門家の人でもこんな人もいるんだ、ということが分かったりする。

—— それに、ピンクとブルーで同じ意見の場合もあったじゃないですか。

—— ええ。意見がミックスしたり、明らかに分けられるときもあったり。そういう傾向がはっきり見えて、面白かったですよね。

—— あと、時間の関係で一度しかしませんでしたけれども、共感できるところにシールを貼りましたよね。市民の意見にはついていなくて、専門家の意見についていたりして、意外でした。手を挙げてこれに賛成とは言わないで、黙ってシールを貼っていったのは意外とよかったなと思います。

—— ピンクの付箋にブルーのシールが貼られていたり、ブルーの付箋にピンクのシールが貼られていたり、意外とごっちゃだったでしょう。あれは想定外でしたね。

—— あと、この意見にはたくさんの方が同意するのではないかと思うものに意外と貼られないこともありましたので、なかなか面白かったですね。全部の回でするのは無理でしょうけれども。

(木村) 他はいかがでしょうか？

—— 「人となりを知る」という意味では、どこかに「休憩時間を設ける」という項目がありました。それと同時に、休憩時間の何気ない会話が大切だと思います。そういうときのほうが、人となりがよく分かるのですよ。お互いに犬を飼っていたりすると、会話が弾んだり。だから、始まる前や休憩時間、終わった後の何気ない会話で、人となりは結構知ることができると思うのです。わざわざ、それをしてくださいと言う必要はないですけども、運営側がそういう雰囲気を作ることは大事かもしれない。

—— 最後のほうは（参加者が）なかなか帰らなかったですからね。

（木村） どうしたらそういう雰囲気を作ることができるでしょうか？

—— 運営側も気軽に声をかけることが大事だと思うのです。緊張させないというか。にこやかにするとか。

—— 前は、私たちはなるべく関わらないようにということで、意識的に離れていた気がするのですけれども、それはよかったですでしょうか？

—— それはそれでいいのですけれども、例えば隣に座ったときに、何気なく、「お菓子はどうですか？」とか、「お茶をどうぞ遠慮なく」とか、そういう会話が必要ではないかと思うのです。テーマに関係ない話です。天気の話とか。

—— テーマに関わる話だと、何をどう言っても誘導しているととられかねませんからね。

—— 行きすぎでは駄目なのです。運営側が 1 人の人に集中的に話すと、それは他の人から見ると異常だから、気をつかって話をしなければならない。

—— 「親しい人を引っ張ったんじゃないか」みたいに。

—— そうです。だから、誰かを捕まえてあまり熱心に話すのは駄目なのです。さらりと平均的に。にこやかにふるまうとか。

—— 床に荷物を置いていたら、椅子に上げてあげるとか。

—— そうです。そういう気づき大切です。

—— 主催者側としては、グループワークや本題以外のところでのちょっとした気づき

や声かけが大事だということですね。

—— 「②人となりを知るように導く」に関連して、少しお聞きしたいのですが、席はくじ引きで決めましたよね。くじ引きは公平だと思うのですが、話したことがない人があるような印象だったのですよ。

(竹中) 実際に、話していない人はいたようです。

—— くじ引きは公平で、誰が見てもよかったのだけれども、全員と話していないという状況を緩和するために、最後の頃は話したことがない人と同じ班にするとか、そんな対応をしたほうがいいのかなど思ったのですけど…。くじ引きのほうが公平は公平ですよ。

—— このフォーラムは公平性や公開性を重視していたから、くじ引きでよかったと思います。

(木村) 一方で、全員と話しかったという要望も確かにあるのですよ。

—— それと、運営側がもうひとつ気をつけないといけないのは、2回目くらいになると、親しい人同士が同じグループになると隣に座るのです。そうすると、その会話ばかりが弾んで、他がなかなか入れないという状況になりかねない。サブファシリテーターがそこを見ていて、グループで座る位置をなるべくバラバラにしてあげることも大事だと思います。

—— ただ、専門家と市民が交互に座るようには心がけましたね。

—— 席の位置までは指定していないでしょう？

—— 指定していません。市民と専門家が交互になるようにだけ指定しましたけど。

—— でも、親しいと、すぐに専門家同士で隣同士になるのですよ。

—— 私がいた班は1つ置きにしました。

—— 基本は1つ置きになっていたと思いますが。

—— でも、お知り合いになると、その人のそばに引き寄せられていくので、そこは注意

して見ておいたほうがいいですね。今日はこちらにどうですか、ぐらいの対応はできるかもしれません。

—— 市民には強制は難しいけれども、専門家のほうには、「専門家同士が隣に座っては駄目ですよ」というお達しを出しておいてもいいかもしれません。

—— でも、市民が集まると、どこかで専門家同士が集まる可能性もありますよね。

(木村) あとは、ABC を引いてもらうのではなくて、席順を引いてもらうという方法もあるかもしれません。1、2、3 と振っておいて。それで、今日は何番の人がファシリテーターです、とするとか。くじの中にファシリテーターの情報を入れておくと、見えてしまうという意見もありましたから、そこには入れない。ただ、作るのが大変ですか？

(竹中) 大変ではないですけども、かちっと席が決まってしまうから、融通は利かないですよ。結局親しい人が隣になってしまうかもしれない。そのときに、席順を変わってくださいとは言えないですから。

(木村) ああ、逆にそうなる可能性がある。どちらがいいのでしょうか。柔軟性を持っていたほうがいいのか。

—— 固まっているときに、分けましょうねとファシリテーターが言えるかどうか。

—— 難しいところですね。人によってはできるかもしれないけど。

(木村) まあ、離れていてもずっとその人と話している人もいますけど。ここは実際にやるときにはどちらかに決めるにしても、少しオプションを取っておきましょうか。

他はいかがでしょうか？ あまり②ばかり話していてもあれなので、「③参加者の冷静なコミュニケーションを導く」「④本音を話し合えるように導く」にも入っていきましょう。

—— タイムキープはどこかに入れたほうがいいと思います。

—— ここにある「コミュニケーションのルール化」というのは、否定しないとか、そういうことですね？

(木村) そうです。

—— 「人の意見をよく聞く」とか。「人の意見を遮らない」とか。

—— 人が意見を言っているときに、次の自分の意見ばかり考えていますからね。

—— でも、まずこのテーマについてそれぞれ付箋に書きましょう。その後、それを順番に発表しましょう、というシステムでしたよね。そういう形だと、考える時間は別途あったわけだから、比較的聞きやすくなりますよね。自分の意見が書けている人は、順番が来るまで人の意見をちゃんと聞けると思います。

—— 一番問題だったのは、付箋に書いて、順番に発表するときに、いちいちコメントする人がいたことですね。コメントはあとにしましょう、というルールを、もっとはっきりときちっとしないと、個人に当てられた時間が食われていってしまう。

—— それはファシリテーターですか？

—— いいえ。ファシリテーターではない参加者です。

あるいは、もう質問したくなって、そこで聞いてしまうとか、いろいろあります。

(木村) ただ、事実確認はその場でやってくださいとは言っていました。貼られたときに付箋の意味を確認する。そこで認識の不一致が起こしてはいけない、という配慮です。

—— でも、事実確認はファシリテーターがするのでしょうか？

(木村) ファシリテーターが、というよりは、ファシリテーターが仕切って行なうことですね。

—— 問題だと言ったのは、事実確認ではなくて、参加者がいちいちコメントしてしまうということですね？

—— そうです。

—— 付箋に対する説明が長すぎて、付箋に書いていないこともおっしゃって、それを我々が書き足していたら、他の方に「不公平だ」と言われたこともあります。付箋をきちんと書いていただければすんなり行くのに、と思いました。

—— 付箋を書いて、それに沿った話をするということですね。

—— あるいは、コメントは短めに、とか。

(木村) 今の話は、つまり、参加者がブレインストーミングのルールや進め方に慣れていないうちに、運営はどうしたらいいか、という話ですね。

—— だから、第1回、第2回は、時間に余裕がないと難しいと思うのです。

—— そうですね。第4回、第5回になってくると、皆さんやることも分かっている、素晴らしかったですよね。

—— 参加者が、ファシリテーターから指示されなくても、自分で意識して時間管理をしていましたよね。

—— 本当は、1回ルールの練習の時間があるといいのですが。

—— 練習のときには、サブファシリテーターが口うるさく言っても大丈夫だと思うのです。本番でそれをやると、介入しすぎだ、という話になるけど。

—— 時間はあるのですか？

(木村) そう、時間の問題ですよ。

—— 自己紹介を練習に当てたらどうですか？

—— ただ、名前と所属だけだと簡単だから、何か簡単なテーマを出したほうがいいでしょうね。今はまっているものとか。それを付箋に書いてもらって、発表する。30秒ぐらいで。

(木村) それは、自分の意見を表明する練習なのか、ブレインストーミングのルールの練習なのかといたら、意見の表明の練習ということですか？

—— あとは、書く練習です。それから、時間を守る練習も含まれますね。

—— そこでいちいちコメントしてくる人がいたら、それはやめましょうね、と注意するとか。

—— あと、書かれていることが意味不明だったら、ファシリテーターさんが、それはどういう意味ですか、と聞くのはいいですよ。その練習にもなる。

—— 確かに、家庭の主婦で、議論をしたこともない、こういう会に参加したこともない方だったら、本当に初めての経験だから、言われたことがすぐ分からなかったりしますよね。キーワードを書きましょうと言われても、何のことかよく分からないかもしれない。

—— 私は未だに一言でキーワードを拾うことができません。ましてや、ずっと家庭にいる人、あるいはそれに準ずるような生活をしている人だったら、一言と言われても、その一言が分からないかもしれません。

—— あと、時間の感覚がないのですよ。話の長さをコントロールするのは難しいから。

—— 普通は長く話していても許されますからね。

—— ここで終わりです、ここで終わりです、というリズムをつかんでいただけるといいですよ。「ああ、今日はこういうリズムなんだ」って。

でも、質問がたくさん来て、そこが長くなると困りますね。

—— でも、練習ということであれば、別に掘り下げる必要はないのだから、切ってしまうでもいいですよ。

—— いきなり重いテーマの話し合いをするよりも、練習をすることで、グループも和やかになりますよね。

—— 練習だから失敗してもいいですし。

—— 誰かが失敗したら、ああ、いい例ですね、と褒める。失敗を褒める。

—— 練習時間をとるという方向ですか？

—— 自己紹介を練習にしてしまうということですよ。

—— ただ、そうすると、自己紹介はグループの中でしか聞けないということになりますけど…。

(木村) 最初は全体で練習をしてもいいかもしれません。

—— 全員でもできると思います。付箋に書くのだし。

—— そのときに、全体のタイムキーパーが 1 人いて、タイマーの音にも慣れてもらう。最初にあれを聞くと、やはりびくっとしますからね。

—— 少ない人数でやるとびくっとするけど、全員であれば。

—— 前回の議事録にあるオープンエンドという言葉がどこに入るか考えていたのですが、まず、④には入ると思います。

あと、否定しないためにもオープンエンドは必要なのかなと思いました。結論を出すと、自分以外の意見を否定したくなるので。そういう意味では③にも入ると思います。

(木村) 「④本音を話し合えるように導く」ためには、やはりオープンエンドは必要でしょうね。あと、「2. 違っていてもいいんだと思える」にも必要かもしれない。

—— そうですね。

—— あとは、前回の議事録から引っ張ってくると、「ファシリテーターから意見を引き出してもらう」というのも④に入るのではないかと。

(木村) 記録の公開はどこに入れたんだったかな。「4. 参加者同士が公平である」か。あとは「5. 運営側への信頼の獲得」にも入っていますね。

—— 記録を見て満足感を覚える参加者の方もきつっているでしょうね。

—— 自分の言ったことがちゃんと反映されていると。

(木村) あと、記録の公開は冷静なコミュニケーションに効くかもしれないと思ったのですが、どうでしょうか？ かなり精度高く公開されるので。

ただ、抑制力と本音というところが裏腹だなという気がします。でも、やはり記録の公開は重要でしょうね。

—— 「2. お互いが違っていてもいいんだと思える」というところとも関わっていると

思います。自分の意見を主張するのは構わないですよ。そして、他の人が自分と立場が違ったり、意見が違ったりしても、それは尊重すると。そこで相手を攻撃するようなこと、否定するようなことさえ言わなければ、両立するのではないのでしょうか。

(木村) 「2. お互いが違っていてもいいんだと思える」には、コミュニケーションのルールも必要だということですね。

—— 何か言ったら否定される、攻撃されるなら、もう言わないという人も多いですよ。

(木村) そういう意味で、オープンエンドも効いてくるということですね。

これは「⑤尊重されていると感じる」にもかなり効いてくるでしょうね。

では、どんどん次に行っていくのですか？ 「2. お互いが違っていてもいいんだと思える」は、あえて1と分けました。「インタビューを踏まえると～」というところで一部書いていますけれども、竹中君、何かフォローはありますか？

(竹中) うーん。1でまとめた①から⑤が効いてくるとうれしいなと思いながら分析するわけですが、それに加えて何か違う要素が必要だ、と言う人がいたときに、それを2に入りたいと思っているので、今の時点で何か言えるわけではないのですけれども。インタビューの分析が終わったら、何か出てくるかもしれないとは思っています。

(木村) なるほど。

違うことに気づくことと、違うことが共存していてもいいと思うことは、やはり少し違いますよね？

—— 違う意見があるというのは分かっても、なかなか後者まではいかないですよ。

(木村) では、2は後で追加ということですね？

(竹中) 分析して、追加したいと思います。

(木村) 1、2に関しては、いろいろな話が出てきたと思いますが、「3. 参加者同士が対等である」や、違うフェイズに入りますが、「4. 参加者同士が公平である」に関してはどうでしょうか？ 「対等」「公平」は、必要とされる要件としては別だと思って、分けて書いています。対等というのは、お互いを尊重するときに必要な条件で、公平というのは、場が成立するために必要な条件だと考えています。

—— 例えば、専門家と市民がいたら、同人数にする。

(木村) それは、「対等」ですね。公平とは違う気がします。

—— 公平のほうにも入りそうな気がしますけど。

(木村) なかなか実現が難しいですけども。

—— でも、市民ばかり多かったり、専門家ばかり多かったら、公平ではありませんよね。

—— 男女比も本当は同じだといいですよね。

—— 専門家は女性が少ないから難しいと思います。社会調査をベースとした参加者選定だから、どうしても専門家の女性は少なくなるわけですよね。

(木村) 専門家に関してはそうです。市民のほうは、できる限り同数にします。

—— あとは、若い人が本当に対等にしゃべれたかどうか。あんなに遠慮するとは思わなかったです。インタビューのときはどうでしたか？

(竹中) インタビューですら遠慮していました。

—— だとすると、それは若いからではなくて、性格の問題かもしれない。

—— 慣れですよ。

(木村) 市民の若い人はそれでも慣れがあったのですけれども、私が一番遠慮しているなと思ったのは、専門家の若い人です。

—— 企業人は、縛りがきついのです。勝手に自分の意見を言うことは許されない。本当はよくないことなのですが。

それは学会のアンケート調査でも出ていて、自由に意見を表明できない風潮があった、と書いていますから。

—— 学生との対話をしているときでも、首都圏は比較的そうでもないのだけれども、地方に行くと、自分の意見を話す訓練をあまりしていなくて、話してくれない人が多いです。

——（若い人は）やはり遠慮していましたよ。大御所と一緒にだと、なかなか言えない。

（木村）　そうですね。特に大御所とグループが一緒になってしまうと、言えない。でも、こればかりは仕方がないですよ。

——　こちらとしては、時間や回数を対等にするしかないと思います。

（木村）　その他に、対等や公平という観点で、ここは気をつけた、あるいは、ここはもう少し気をつけたほうがいいのではないか、ということはありませんか？

——　以前の議事録にも書いてあった気がしますが、年齢層が2分割だと、うまくいかないのかもしれないと思いました。中堅どころがあまり呼べないという困難さもあるのですが、上層（40歳以上）はおじいさんばかりに見えたので。

——　おじさんぐらいの人がいないということですね。

——　そのくらいの年齢の方は、やはり忙しいのでしょうか。

——　少し角度の違う意見と申しますか、こういうことがあったという経験を言いますと、「マスコミはこういうことを言っていますけど、どうですか」というコメントと、自らが思っていることを、違う色のペンで書く、という枠組みがありました。マスコミや他の人が言っていることは赤いペン。私の意見は青いペン、というような。

（木村）　我々のフォーラムでは、「私の意見」を言ってもらえばいいと思いますけど…。

——　だけど、「自分はあまり意見を持っていない」という人もいますよ。

　そういう人が、例えば、「新聞でこういうことが書いてあるのですけれども、本当ですか？」という意見を書いたりしていました。

（木村）　それは、「マスコミはこう言っているけど、それが本当かどうか分からない」という「自分の意見」なのですけどね。

　一応コミュニケーションのルールで、『『私は』』という話し方をしましょう』と申しているのです。

——　「マスコミはこう言っているけど、私もそう思う」か、「マスコミはこう言っている

けれども、私はそう思わない」か。そこまで書かないといけないということですね。

(木村) 初期の段階ではそれが分からない場合もあるでしょうから、それを徹底させるようにはたらきかけることが必要なのでしょう。

—— 「4. 参加者同士が公平である」に関してですが、反射的に自分の意見が言える人もいたけれども、非常にゆっくりしか言えない人もいました。その人に対しては、時間についてもそれほど厳しく言わないで、焦らせないで、待ってあげたいと思うのです。厳密に言えば、公平に、1分なら1分で切るべきなのでしょうが、1分は厳しすぎるかな、という人もいましたよね。そして、待っていればちゃんと自分の意見を言ってくれる。そういう方に対して、時間的な公平性というのはどうしたらいいのかなと思いました。

—— 全国で学生たちと対話をしていると、東北の学生さんは、話すのは遅いけれどもしっかりしたことを話す人が多いですね。

—— 口に出す前に、いろいろ考えているのでしょうかね。

(木村) どうでしょうか。でも、臨機応変に対応するのでしょうかね。

—— ゆっくり話す人を止めるよりは、たくさん話しているのに、さらに時間を越えて話している人を止めるほうが、皆が納得しやすいのではないのでしょうか。

—— そういう感覚は、最初は分からないけれども、回を重ねるうちにメンバーは分かりますよね。呼吸というか。

—— まあ、際限なくは待てないけれども。

—— そういう感覚でいいならば、私も賛成なのですけれども。

あと、付箋に追加で書くことに対してもいろいろ苦情が出ましたが、書くのが遅い方もいて、なんとか拾ってあげようと思って、補足的に書いたりするのです。それに対していろいろ言われると、ちょっと苦しいな、という感じがします。

—— 完全な平等ではないですよ。やはり臨機応変な平等でないと。

(木村) 公平、対等、そうか、これは公平なのかな。

—— 平等ではないけれども、公平だということですね。その人の個性に合わせて。

—— そういう意味では、第 4 回で、皆さんに好きなテーマを書いてもらったときには、ゆっくり話される方も非常にいいことを書いてくれました。ああいう節目があってもいいのかなと思います。

あと、「5. 運営側の信頼の獲得」の中に「記録の公開」がありますよね。そういう意味では、議事録作りのスキルは非常に重要だと思うのです。裏方のスタッフというか、見えないけれども、非常に大事だと思うのですね。こういうシステムを構築するためには、そういうスタッフの育成、もしくは、できる人を確保することが大事だと思います。

—— 公開された記録に対して、参加者から、「私はこういうつもりで言ったのではない」とは言われなかったのですか？

—— 1 回だけ、単語の間違いの指摘がありました。

(木村) 参加者は結構読んでいます。そして、記録に関するクレームはありませんでした。自分の発言を読んで、そこに間違いがなければ、「ああ、この信頼度だったら他の人の発言も間違えていないだろう」という読み方をしていると思います。

—— あと、「元気ネットのことが、終わった後（シンポジウムするとき）に分かった」というご意見がありましたよね。初回である程度言っていないでしたっけ？

—— 少しは話しているはずですよ。

—— 言ったけど、全然聞こえていないということなのではないでしょうか。

でも、そういうご意見があったことも踏まえて、それほど念入りでなくてもいいけれども、「こういう立場の NPO で、サブファシリテーターという役をやらせていただいています」ということをはっきりと言ったほうがいいと思います。ワークショップの運営を何十回もこなしていて、かなりの回数を経験しているということも紹介しておけば、多少信頼の獲得に役立つのではないかと思います。

—— 初日に、「なぜこんなに NPO の人が多くなきゃいけないの？」と聞かれました。皆一緒だと思っているわけですよ。

(木村) 「参加者のやる気」についてはいかがでしょうか？ まあ、応募する方は、そもそもやる気があるのかもしれませんが。

運営側がちゃんとやっているなと思えると（運営側の信頼が獲得されてくると）、やる気が出てくる、というのもあるかもしれないと思うのですね。あとはどうですか？

—— 謝金はひとつの要素になると思います。

—— 会場に来ることに対するやる気と、積極的に議論に参加するやる気は、別だと思うのですよ。しゃべらなくても謝金はもらえるわけですから。

やはり、話したいと思えるようなテーマを選ぶことが大事なのかなと思います。

—— このフォーラムは、積極的参加者で構成されていますよね。最初からそういう設計です。話し方についても、グループの中で話すのもあれば、全員の前で話す機会もある。自己紹介やまとめの一言の時間を毎回確保しました。グループワークの発表もありました。発言の機会が多様だったので、それがよかったのではないかと思います。

—— 市民の方で、「まったく知識がなくて、初回は皆さんの会話を聞くことしかできなかった」という方がいましたよね。事前に知ってほしい知識をお送りしたほうがいいのか？

(木村) それは誘導になるので、しませんでした。

—— そうすると、知識がなくてもしゃべれることということ、何でしょうか…。

—— やはり、普通の生活に関連する話題があるということです。誰でも話せる共通の話題を入れる。

—— あと、「5. 運営側への信頼の獲得」に戻りますけれども、何回目かは忘れてしまいましたが、「サブファシリテーターがムラ側の人間なのではないかと思って、やる気をなくしました」と言われたことがありましたね。

—— それは後のほうですか？ 初めのほうですか？

—— 最初のほうだと思います。そういう誤解があると、気持ちがダウンしてしまうこともあるのだなと感じましたので、そういう意味でも、立場を最初に明らかにしておくことは大事なのかなと思いました。

—— やる気に関しては、第1回のときに、受付で、「名刺があったらください」というよ

うな表現があったかと思うのですが、それで少し引いてしまった市民の方がいました。名刺を持っていないという引け目を感じてしまわれたようです。

—— そうですよ。主婦やパートタイマーは持たないですからね。

—— フォーラムは、第1回、第2回、第3回と参加して行って、皆で醸成していくものでしたよね。テーマも皆で変えていった。だから、欠席すると結構きついのかもしれないな、と感じました。欠席者に対して、どういうフォローをしてあげればいいのかなど。

—— 欠席された方には、その回の資料は送られているのですか？

—— 送っていないです。

—— 議事録もつけて郵送すればいいのではないですか？

(木村) ウェブ上には出ています。開催後1週間で出すようにしていました。

—— ウェブ上ではなくて、郵送のほうがいいと思うのですが。

(木村) いや、それはかなり大変な作業になってしまうのですよ。議事録は、多いときは100ページ以上ありますから。それを印刷して郵送するだけでも馬鹿にならないので。

—— では、テーマが変わったということだけはお知らせしてはどうですか？

—— でも、自分の都合で休んでいるわけですからね。

(木村) 欠席者にそこまでフォローしていくと、逆に不公平になりませんか？ だから、ウェブ上にありますからと言って、それで勘弁してもらおうのが合理的かなと思っているのですけれども。

あとは、運営陣がどこまでやるか、どこまでやれるか次第です。議事録を作って、印刷して、送るとするのは結構大変です。

—— 休んだ方はウェブを見てくださいと。それを最初に言っておいたほうがいいですね。

(木村) ただ、逆に、欠席したときは読んでみてくださいと言われてたら、もう来なくなる人もいるかもしれない。だから、ウェブに記録があります、と言うくらいに留めたほう

がいいのではないかと思っています。

—— 確かに、100 ページの資料が送られてきて、これを読んできてくださいと言われたら嫌ですね。

—— すみません、全然違う話なのですが、忘れないうちに。今回のフォーラムではファシリテーターをくじで選定しましたよね。でも、全員はなっていませんよね。全員が 1 回はファシリテーターになる、というのは駄目ですか？

(木村) 順番を最初に決めていけばいいのですが…。

—— そもそも全員にあたるのですか？

—— ギリギリ足りるのでは？ 1 日 2 回、3 グループで 6 人。第 2 回、第 3 回、第 5 回で 18 人。あとは初回で数人。なので 20 人は当たりますよ。

—— くじ引きでなければ。

(木村) ええ。最初から決めていけば足りるけど、欠席者の対応もしながら調整できますか？

—— そこまでは無理です。

(木村) だから厳しいと思うのです。なので、こちらでコントロールしているように見られるよりは、公平性を取ったほうがいいのではないかと思います。

—— ただ、やりたい人がやれないのは、なんとなく申し訳ないと思いますね。

(木村) くじ運がなかったということで諦めてもらうしかないですね。公平、公正というのは本当はそういうものなので。

結果の平等を求めると、公平性は損なわれてしまうのです。だから、機会の平等でいいのです。欠席者のフォローをあまりしないのも、機会が与えられたのに来なかったのだから仕方がないでしょう、という考え方です。必要以上のフォローをすると、機会の不平等につながってしまうので。

—— フォローしたからといって、思うような結果が得られないことも多々ありますし。

(木村) ええ。逆に、「なぜあの人ばかりフォローしているの？」ということにもなりうるのでは。

もう少し時間やお金があれば、毎回開催案内を郵送することもできるのですけどね。

1回きりの場合は、いかに人を集めるかということが大切になってくるので、手間をかけることも大切なのですけれども、何回も繰り返すときにはまた別だと思っております。

—— 「参加者のやる気」。どうしたらやる気になるかな。毎回必ず褒める。「今日の発言はよかったですね」と言われるだけでもやる気になりませんか？

—— 褒められる人が偏ると大変じゃないですか？

—— 全員を褒めるのですよ。今日のグループはよかったですね。皆さんのおかげですごくいいグループワークができました、って。

(木村) 私も、総合ファシリテーターから、「最後に木村先生に締めてもらうけど、感謝が大切ですからね」と言われましたよ。

—— 何回も何回も言うことが大切だと思います。グループワークのときはサブファシリテーターが言う。最後に木村先生も言う。総合ファシリテーターも言う。皆さんが帰るときにも、ありがとうございましたと言う。そうしたら、次も来たいなと思うじゃないですか。

(木村) 褒めるというか、感謝を伝えるということですね。

—— 前はそれが足りなかったですね。

—— 「主婦は名刺を持っていない」ということと、やる気との関係は？

—— 「名刺をください」と言われるとやる気をなくすということです。

—— 名刺をもらわなければいけない理由は何だったのですか？

—— 連絡先の確認だったと思います。もしあれば、という言い方しかしていませんけど。

(木村) 必要事項の記入用紙を作って、それに書いてもらえばいいのではないですか？

—— それを渡したときに名刺をくれたら、それはそれでいいし。

(木村) どんな情報が必要なのですか？

—— 住所と連絡先です。源泉徴収票を郵送する必要がありますから。

—— でも、それはフォーラムの参加申込書に書かれているはずですよ。

(木村) そうすると、名刺をもらう必要はないですね。

—— ないけど、あればくださいと言ってしまったということですね。

—— 名刺の話ではないのですけれども、課題を出した回がありましたよね。あれはとてもよかったと思うのです。もちろん毎回というのは難しいと思うのですけれども。

専門家の方は大量の資料を用意してくださいましたよね。一般市民の方が用意できる資料はあまりなかったのかもしれないけれども、改めて自分が知りたいことを書き出してきた方もいらっしやっただと思います。毎回はできないでしょうけれども、またああいう回があってもいいなと思います。

—— 多い人は40ページくらいでしたね。

—— 枚数の制限はなかったけど、やはりそのほうがいいのでしょうか？

(木村) そのほうがよかったと思います。

あれは嫌でした、と言った人はいなかったです。どちらかというと、フォーラムが終わった後もたまに見返して、新たな発見があるみたいでしたから。

(竹中) 量が多いことに関しては、「専門家ってこういう人なんだな」と思ってもらっても構わないと思いますし。

(木村) そうですね。専門家というのはこんなに語りたいたい人たちなのか、ということがうまく伝わった回だったので。

—— 専門家に偏ったかもしれませんが、やる気は出たのかなと思いますね。

(木村) でも、市民の人たちにとっても、いろいろなことが書いてあってよかったみたいですよ。資料集として。

—— 準備するほうは大変かもしれないけど、参加者にはよかったのかなと思います。

—— でも、宿題は1回でいいと思います。

(木村) 第4回というのもいいタイミングでしたね。最初から宿題を出されたらやる気が出ないと思うので。

—— あときは、感想をその場で書いて、その後共有しましたよね。あれはよかったと思います。別の会で真似させていただきました。

—— 集合写真は撮ったんですっけ？

(木村) 撮っていないです。参加者の情報は一切出せませんから。

—— いや、公開はしないのだけど、記念にもなるし、やる気も出るのではないかなと思ったのですが。

—— 撮ると、どこかから出てしまうかもしれない。そうすると、迷惑がかかる人もいるかもしれない。こちらは撮らないほうがいいと思います。参加した人たちが自分たちで撮る分には構わないけど。

—— スタッフの顔は見たほうがいいですか？ ホームページに写真を出すとか。

—— 顔と携帯電話の番号が出ていたら、信頼が上がるらしいですよ。

(木村) はい、そう言われています。申込書に携帯電話の番号を入れているのはそういうことも踏まえてです。

さて、一通り議論できたかと思います。ノウハウに関してはまだまだあるかもしれませんが、そろそろ終わりにしていきたいと思います。

—— 運営側のノウハウは、まだたくさんありますよね。

(木村) おそらく。ここは来年度にさらに整理してもいいのかもしれませんが。

—— 予行演習をやるとか。いろいろな想定でやってみるとか。

(木村) 予行演習はやっておいてよかったですね。

それでは、今日の議論を踏まえて、またこちらで整理したいと思います。

2. その他

(木村) 最後に、次回以降の日程を確認して、終わりにしたいと思います。

第9回は、2月24日の13:00から開催します。ここでフォーラム参加者の確定をします。その前に、皆さんのところに、今このくらいの応募があるので、このくらいの追加募集をお願いします、という話が行くことになると思いますので、よろしくお願いします。

第10回は3月11日です。システム要件に照らしたインタビュー分析の結果をお出しできると思います。それが報告書の中に入って、今年度のフォーラム研究会はそこで終了ということになります。

また、第5回の業務推進全体会合の日程も、近日中にメールでお知らせしようと思いますので、よろしくお願いします。

では、これで今日のフォーラム研究会を終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

以上